（別紙２）

〈現われ〉とその秩序

メーヌ・ド・ビラン研究　　村松　正隆

本論文は、フランス・スピリチュアリスムの祖と目される１９世紀初頭の思想家・政治家メーヌ・ド・ビランの哲学を、むしろ１７世紀前半にデカルトが開始し、ロックが新しい道に引き入れ、コンディヤックが洗練し、それが孕む諸問題の解決にデステュット・ド・トラシらイデオロジストが努力した百数十年に及ぶ哲学の動きに対する最終的解答となるであろうような姿において描きだしている。

第１部は、ビランの初期思想の発展を、先立つ哲学者たちの諸学の統一の理念を継承しつつ、方法上、彼らに対立してゆくものとして活写する。諸学は、学が人間の諸能力によって産出されるものである限りで、人間の諸能力の分析と規範的な様態の記述をなす人間の科学において統一されるはずであるが、その科学を形成するためには、先人たちと違って諸能力を用いる〈私〉自身の内的視点を見失わないようにすべきなのである。

第２部は、ビラン哲学の幾つかの中心概念を選び、それらの相互連関を探る。論者は、努力において顕わになる自我と身体との不可分の二項からなる根源的事実と、〈私〉がこの事実から取り出し、さまざまな現われを構造化し秩序づけてゆく原理として用いる反省的諸概念との詳細な内実を、あり得る様々な誤解から禦ぎつつ示すことに成功している。

第３部は、〈私〉がどのように具体的現われを秩序づけてゆくかを、現われのさまざまな現出仕方と受容仕方、更に現われを変化させ、産出しもする様、これらを区分けして丁寧に記述する。出色なのは、自我の諸能力の体系とは異質で人間の動物的な生に由来する諸力の体系である触発的体系を、その記述がどのような事情でどの程度まで可能なのかに目配りしてなす周到さである。そして、全体としての記述が目標とするのは、一つには、最終的に私たちが生きる「通常の世界」の安定した構造が多様な要素を内包しつつどのようにして可能となっているのか、その現われの秩序の生成全体の見取り図であり、もう一つは、そのような記述そのことを可能にする私たちの反省という能力自体の適切な位置づけである。

本論文は、〈私〉が自らの実存を見いだす「通常の世界」を織りなすさまざまな現われのありようを、〈私〉の諸能力とのかかわりの中で測定し、配分し、概念化しようとした哲学者としてメーヌ・ド・ビランを捉え、その限りでのビランの思索を探索し整合的に描出した。これは、ビランが、初期に属する『習慣論』を別にして書物を出版せず、未完成の夥しい草稿のみを残したという事情を考慮するとき、多大な労苦をもってのみ可能なことである。ただし、習慣の形成とさまざまな種類の諸記号の働きが絡むことによって出現する人間の生のダイナミズムが、紙数その他の関係で意図的に考察外におかれたこと、また、論者が扱ったとは全く別の趣をもつビランの最初期と特に晩年の思索への言及がないことも、主題からして致し方ないこととはいえ、些かの憾みが残る。しかしながら、メーヌ・ド・ビランについての邦語研究書が数少ないなかで、本論文は今後、ビランが成し遂げたことが何であったのかを確認するために欠くことのできない範例的論文となろう。本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。